



## 16・17世紀のイギリスにおける 工業文明の誕生と美術

— J. U. ネフの工業文明論の一側面 —

中 村 進

**概要** アメリカの経済史家 J. U. ネフは人類の生み出した文明を質の進歩を求める伝統的な文明と量を追求する近代的な文明に二分し、後者を工業文明と名付け、この文明は16世紀にイギリスの熱エネルギーとしての石炭の採用を契機にして誕生したと提唱した。他方、工業文明が誕生した16世紀から17世紀中葉の間のイギリスとフランスの美術年表を点検すると、フランスの場合、西洋美術史において活躍し名を残した画家が連綿と続いているが、イギリスに目を向けるとそこはほとんど空白になっている事実気付く。その理由の一つがイギリスの工業文明の誕生、別言すればイギリスの石炭燃料の家庭と製造業での採用と深く関わっていると思われるので、工業文明を16世紀から17世紀のイギリスとフランスの美術の発展という側面から究明し、同時にこの文明の発展のためには質的進歩を志向する文明の重視が不可欠な条件であることも明白にしたい。

**キーワード** 工業文明、石炭、J. U. ネフ、16・17世紀イギリス美術、初期産業革命

**原稿受理日** 2009年5月30日

**Abstract** J. U. Nef, an American economic historian insisted that there were two kinds of civilization in European history. One is the civilization that pursues the quality, in other words, the beauty. Another is the civilization that pursues the quantity, which leads to mass production. The latter is called the industrial civilization, which was born in the 16th century in England. On the other hand, when we glance over the chronology of English and French art from 1540 to 1640 during which the industrial civilization emerged, we can find the fact that there were a lot of historically important painters in France, but there were no preeminent painters in England. It is possible to relate one of the reasons of the fact with the birth of the industrial civilization, that is, the use of coal at home and for manufacturing in England. In this paper the author attempts to explain the relationship between the rise of the industrial civilization and the development of art in England and France.

**Key words** industrial civilization, coal, an early industrial revolution, J. U. Nef, art in the 16th and 17th centuries in England

## はじめに

石油危機が過ぎた1970年代後半に16・17世紀イギリスのエネルギー危機をすでに1930年代に研究していたアメリカの経済史家、J. U. ネフが科学誌、*Scientific American* (『サイエントフィック・アメリカン』)に「初期の燃料危機とその結果」(J. U. Nef, “An Early Energy Crisis and Its Consequences”, *Scientific American*, 237 [1977]. 1988年12月27日付けのワシントン・ポスト [*The Washington Post*] やニューヨーク・タイムズ [*The New York Times*] の死亡記事によると、ネフ教授は1988年12月25日、日曜日に20年以上住んでいたワシントンで病気のために死去された。享年89であった。彼は1929年にシカゴ大学の経済学の准教授、1936年に同大学の経済史の教授に就任した) という論考を寄稿し、「16世紀においてイギリスは木材が不足し、石炭に依存した。新しい燃料の採用はおおよそ200年後に産業革命で最高潮に達する一連の出来事の口火であった」(*Ibid.*, p. 141) とし、彼の初期産業革命論を展開した。そしてこの論考の最後で彼は将来のエネルギー問題を次のように展望していた。

今や思うに量の進歩、つまり生産量の増加への強くなる信仰は一層重要な要素であった。16世紀後半に新しい注目が量の概念に払われるようになってきた。この新しい関心の効果は自然科学の発展のなかで使用されたより正確な計測やユリアス暦を一層正確なグレゴリア暦に置き換えるなかで見られた。……エリザベス時代に導入された成長の割合という着想は経済学研究に新しい正確さをもたらした。新しい見方は人間に対する量的目標の十分に可能な価値を強調した。工業の目的の変質は工業化世界へ向かっての大きな進歩の一部をなしていた。……

石炭が18世紀後半からその後に至るまでにイギリスからヨーロッパに普及していくにつれ、製造業や人間の環境における美に対する関心が薄れていった。歴史を通して美へのこの種の献身は経済成長への合理的な制限を設けることにおいて重要であった。石炭の到来はこのような美に対する献身を減じたようにみられる。地球上の資源開発はしばしば優秀な審美眼の領域を汚してきた。これらの資源を最大限に利用することは発明の独創性のみならず制限を必要とする。現在、化石燃料への人間の依存は約400年まえの木材のそれと同じくらい不確実である。燃料資源の実のある開発における最良の期待は美の水準を回復することと拡充することにあるといってもよい。人類がもし前進しようとするれば、その歴史の発展は美術、つまり美の追求でなければならない。( *Ibid.*, p. 151.)

16世紀中葉に始まったイギリスの木材燃料危機をその代替燃料である石炭の採用で乗り切ったイギリスは同時期に世界で最初に量の追求を本質とする工業文明を生みだし、それを契機にこの文明は世界各国に経済成長を伴いながら広がり定着していった。1970年代に石油燃料危機に遭遇したときに、経済成長を抑制する要素として工業文明出現以前に世界共通の文明であった質の追求を目的とする伝統的文明の重要性が再考されるようになっ

た。工業文明を歴史的に分析したネフは工業文明の発展にはその基礎に質的進歩を求める伝統的文明の存在が不可欠である点を指摘していた。そして20世紀の70年代の地球規模でのエネルギー危機を回顧し、改めて質、その中心要素である美の追求する文明の重大な役割を洞察していたのが今、その最後の部分を引用した彼の晩年の論考であった。

もとよりネフは19世紀後半に生誕した経済史は過去何百年のあいだ、学問の特徴を形成していたその細分化や専門化よりも、歴史の相互関連の研究、つまり‘知識の新しい総合’を目指すべきであるとし、その可能性の探究を経済史家の責任に任せ、彼らは新しい社会科学の分野としての経済史の確立を志すのではなく、すべての社会科学を一つの普遍的な哲学的目的に纏めあげることに尽力すべきであると説いた（Nef, “Responsibility of Economic Historians”, *The Journal of Economic History*, Supplement, [1941], pp. 3, 5.）。彼のこうした経済史への接近の姿勢は彼の16世紀から産業革命前夜のイギリスの石炭産業の実証分析した最初の著書である『イギリス石炭産業の勃興』にすでに見出すことが出来る。彼はこの作品の序文において「石炭産業を研究する歴史家は多くの学問分野に通じていなければならない。彼の知識は技術、ヨーロッパ経済史、政治史、憲政史、法政史に広範囲に及ぶべきである」（Nef, *The Rise of the British Coal Industry*, vol. I, 1932, p. xii）と論じ、石炭産業という彼の研究対象の性質に左右されたのであろうが、彼の研究の出発点から学際的な研究、別な言葉で記すと、歴史の相互関連性を意識したことが窺える。（拙著、『工業社会に史的展開—エネルギー源の転換と産業革命—』晃洋書房、1987年、229ページ。またネフの経済史の捉え方については拙書、223-229、247ページを参照。）ネフは木材から石炭へのエネルギー源の転換の事実を中核にして進められた彼の勃興期から産業革命に至るイギリス石炭産業の実証分析のあと、彼の関心は主として1930年、1940年代に16・17世紀のイギリスとフランスの工業、憲政、技術、芸術、戦争などの比較研究に注がれ、1950年代にこの諸成果をもとに工業文明の生誕と形成を構想した。それは1953年3月から5月のコレージュ・ド・フランスで行われたネフの講義で明らかにされ、翌年、パリで *La Naissance de la Civilisation Industrielle et le Monde Contemporain*（『工業文明の誕生と現代社会』）という形で上梓された。ネフは「20年来、わたしはこの主題に関心を持ちつづけている。大学在職のあいだにわたしの公けにしたかぎりの仕事の大部分が、そのための足場として、わたしに役に立った次第である」（Nef, *La Naissance de la Civilisation Industrielle et le Monde Contemporain*, 1954, p. 1. 宮本又次他訳『工業文明の誕生と現代世界』未来社、1963年、1ページ [以後、本書は *Civilisation Industrielle*, 『工業文明』として引用する]）。ネフの工業文明については Nef, “La Civilisation industrielle”, *Encyclopaedia Universalis, France*, vol. 8, 1980, pp. 966-972 も参照）と記しているように、

彼にとって工業文明の歴史的探究はその研究対象が広範にわたり (*Ibid.*, p. 9. 同書, 1ページ), 歴史の相互関連の求める経済史研究に対して申し分のない相応しいテーマであった。

こうしてネフは人類の生み出した文明を質の進歩を求める伝統的な文明と量を追求する近代的な文明に二分し, 後者を工業文明と名付け, この文明は16世紀にイギリスの熱エネルギーとしての石炭の採用を契機にして誕生したと主張した。

翻って, 工業文明が誕生した16世紀から17世紀中葉の間のイギリスとフランスの美術年表を点検すると, フランスの場合, 西洋美術史において活躍し名を残した画家が連綿と続いているが, イギリスに目を向けるとそこはほとんど空白になっている事実に気付く。エリザベス朝やステュアート朝に文学の分野ではシェイクスピアを始め多くの文人を世に送ったイギリスでどうしてこの時期に美術の分野はヨーロッパから取り残されたのか。この非常に素朴な疑問が本拙稿を取りかかるための切っ掛けであった。その解答がイギリスの工業文明の誕生, 別言すればイギリスの石炭燃料の家庭と製造業での採用と深く関わっていると思われるので, 工業文明を16世紀から17世紀のイギリスとフランスの絵画作品という側面から究明し, 同時にこの文明の発展のためには質的進歩を志向する文明の重視が不可欠な条件であることも明白にしたい。その際, ネフが1943年に発表した「1540年から1640年のフランスとイギリスの美術」(Nef, “Art in France and England, 1540-1640, *Thomist*, Vol. 5[1943]. 以後, この論文は“Art”と略して引用する)という論考に導かれながら論ずることにする。

## I. 16・17世紀のイギリスとフランスの製造業

### 1 16・17世紀のイギリスとフランスの製造業の比較

ネフは16～17世紀のヨーロッパの各国の経済趨勢およびその特質を地理的に3分割して観察した。それらは (1)生産量の低下と工業的企業の規模の縮小, 農業に比較して工業の相対的重要さの減退が生じた地域, (2)芸術品及び奢侈品の生産の顕著な成長, つまり芸術と熟練の新しい発展のなかで諸重工業の生産量の僅かな増加, 結果的には工業生産量に著しい変化が起こらなかった地域, (3)諸重工業の拡張, その結果として前例のない生産量の拡張が現出した地域からなり, それぞれの地域は具体的に示せば, (1)の地域にはヨーロッパの大部分とスペインとその支配地, (2)の地域にはイタリア, フランス, スイスの国々, (3)の地域には北ヨーロッパ, とくにイングランドであった (Nef, *War and human progress*, 1963, pp. 6-10)。このうち(2)と(3)の地域の工業生産の目標は極めて対照的であり, 本節では

両地域で見出されるこの鋭い対照を経済史的に解明したい。

イギリスの場合、16世紀後半から目覚ましい生産の促進が起り、多くの工業が初めて繁栄を経験したし、旧来の工業も錫製造業を除き、2～6倍、ある製造業については8～10倍に生産量を伸ばした。以前の何世紀と比較すれば、革命的と言える製造業における成長がエリザベス1世時代の開始し、1580年頃からさらにそれは急速になった。すでにこの国はフランスよりも、人口に比して、より多くの石炭、錫、鉛、毛織物を産出していたが、他の工業生産物は非常な遅れをとっていた。(Nef, "A Comparison of Industrial Growth in France and England from 1540 to 1640", Do., *The Conquest of the Material World*, 1964, p. 210 [以後、この論文は"Comparison"として引用する。])しかし修道院解散後の1540年ころから17世紀内戦勃発に至るおよそ100年間にイギリスは石炭産業を中心に鉱山業や製造業が大きく発展し、それ以来、ヨーロッパの工業技術や重工業の発展における主導権を19世紀後半まで保持することになる(Nef, "Art", p. 284)。その経過はこうである。

イギリスで16世紀に顕著になり始めた木材飢饉が原因になって薪から石炭への熱エネルギー源の転換が新熱源採用における技術の改良を伴いながら生じ、その結果、一つの産業革命と考えられるほどの飛躍的な経済発展がイギリスに引き起こされたのであった。そしてネフはこの16世紀から17世紀にかけて起こったイギリスの経済発展を初期産業革命と命名し、その重要さは18世紀のそれに比べ少し劣る程度のものであったと評価した(Nef, *The Rise of the British Coal Industry*, Vol. I, p. 165)ことはよく知られている。実際、製塩業、金属加工業、繊維業、醸造業、染色業、ガラス、タイル、タバコのパイプ、陶器、砂糖、石鹼、糊、蝋燭、パン、火柴などの製造業が燃料として石炭を採用し、今までの木材燃料の依存から脱出し、各々の製造業の生産性を大きく上昇させた(前掲拙書、86ページ)。そして木材燃料である薪から石炭への熱エネルギー源の切り換えという事実が、別言すれば、薪と比較して燃料としての質の劣悪さと量の豊富さという石炭のもつ特性が「経済を量の追求の方へ、つまりエレガンスの美よりも産出量や能率の増進いかに成功のかかっていた種類の工業の進歩の方へ必然的に志向させる」(Nef, *Civilisation industrielle*, pp. 47-48. ネフ『工業文明』53ページ。また石炭の工業文明の成立期における重要な役割に関しては Nef, "The Genesis of Industrialism and of Modern Science, 1560-1640", Do., *The Conquest of the Material World*, p. 272 も参照。ネフの量を追求する工業文明への言及は1932年に刊行された *The Rise of the British Coal Industry* のなかですで見出されていた。彼は「エリザベス1世時代やその後発展した新しい需要はもともと装飾よりも使用のために必要とされた粗悪な金属による製品に対してで、それらの価値が大量にあることと安価さに由来している製品であった」[Nef, *The Rise of the British Coal*

*Industry*, Vol. I, p. 170] と当時の金属製品について論及していた) 新しい文明の誕生をもたらした。ネフはその文明を工業文明と称し、これまでのヨーロッパの伝統的な「質を追求する文明」と区別した。つまり16世紀から17世紀にかけて「イギリスの石炭を基礎として築き上げられた全く新しい性質の経済の発達が質の追求から量の追求への転換をうながし」(*Ibid.*, p. 48. 同書, 53頁), 量の追求が第一義的な要素となる工業文明を新規に生み出したのである。こうしてイギリスは工業文明の上にチャールズ1世治世までにイギリスは人口に比する工業生産量はフランスより確実に大きくなり、首都、ロンドンは世界の主導的な工業都市の地位を獲得した。(Nef, "Comparison", pp. 209-210.)

ネフが関心を示した16・17世紀のイギリスを主要な研究対象にしていたジャック・フィッシャー教授(1908-1988 フィッシャーはまだ若い24歳の頃にネフの処女作である *The Rise of the British Coal Industry*, 2vols の校正を引き受け、熱心に忍耐強くしかも貴重な示唆を示しながらその仕事を果たした。[Nef, *The Rise of the British Coal Industry*, vol. I, p. xiv. F. J. Corfield, "F. J. Fisher and the Dialectic of Economic History", F. J. Corfield and N. B. Harte eds., *London and the English Economy 1500-1700*, 1990, p. 5]) にとってもこれらの世紀のイギリスにおいて一つだけ十分にはっきりして疑う余地のない事実は農業・工業生産の増加であった(Fisher, *The Sixteenth and Seventeenth Centuries: The Dark Ages in English Economic History*, Corfield et al eds., *ibid.*, p. 135. [フィッシャー, 浅田実訳「16・17世紀—英国経済史上の暗黒時代か」『16・17世紀の英国経済』未来社, 1971年, 17ページ)。さらに彼は続けて

「テューダー朝初期の英国には、未開発の天然資源—遊休地・未開利用森林地・未開使用鉱物資源—が豊富にあった。17世紀の末までに、これらの資源はずっとよく利用されるようになっていた。ますます多くの土地が耕作されるようになっていたし、森林地帯は薪を供給するため注意深く管理され、穀物生産や牧草栽培用の空地をつくるに掘りおこしたりされるようになっていた。鉱物の産出高も、石炭は目覚ましい増加をみせていたし、鉄、鉛、塩の場合も着実な伸びを示していた。……第二次産業の分野も、新毛織物の導入とか、木綿・絹織物・ガラス製造・製紙・真鍮製造・製糖といった各業種のほか、これまでであっても微々たる物であったその他の業種などが、いずれも発展したために、著しく幅の広いものになった。また外との世界とこの国との経済的關係においても、変化は漸次的なものであったが、その積み重ねによって生まれた結果は底の深いものであった。……14世紀末から17世紀末までの間に、英国の人口はほぼ2倍になった」(*Ibid.*, pp. 135-136. 同論文 17-18ページ)

と16・17世紀のイギリスの経済状況を生き活きと捉えていた。

他方、ネフは工業文明の誕生以前のヨーロッパでは工業文明の発展にとっても不可欠である質を追求する文明が支配的であったと思考する。そして彼は質の追求を支えているものは美と信仰とを目的とする精神であり、とくにその追求は芸術家や宗教家にとって第一

義的に重要な要素であると指摘した。もとより質の追求は美の探究を意味し、それが重要な構成要素となる。そのため質、つまり美を追求する文明は芸術の発達に寄与し、工業文明の本質とされる重量、容積、価格、時間などの統計的計算、言い換えれば量の及ばないところにわれわれを引き上げる。その場合、芸術家は資材の節減や仕事の念入りさや時間の節減に腐心するのではなく、経済的に浪費をおこなうことによってつねにより真実の、より美しい成果を目的とする。そしてこのような文明に根ざした社会において質の追求、つまり美の追求が、経済の原動力であり、工業生活において最も尊重された活動原理であった。（Nef, *Civilisation Industrielle*, pp. 13-14, 16, 27. ネフ『工業文明』12, 15, 29ページ。）従って、工業文明が生誕する16世紀中葉まですべてのヨーロッパ諸国の主要な経済的な事業がその本質的な目的としていたのは恒常的であることであり、織物や建造物に関しては、そのもつ美、偉大さ、華麗さ、あるいは魂に対する訴えゆえに、熟視されるに値するものを作ることであった。（*Ibid.*, p. 50. 同書, 55ページ。）こうした古代・中世と続く伝統が16世紀以降、フランスでは受け継がれ、イギリスとは対照的なフランスの工業の、さらにはこの国の経済発展の特徴を形作ることになった。

16世紀中葉からの約100年の間、フランスでは新しい大規模工業が導入されることなく、また同期間のイギリスで見られたような塩、ガラス、鉄、金属製品、建築資材などの未曾有の成長も起こらなかった。石炭、塩、ガラスなどはとくにリヨン周辺とロワール川沿いとローン渓谷地域の中央フランスにおいて増加し続けたが、南フランス一部を除くその他の地域では工業発展は停滞していて、一般にフランスの工業成長は16世紀中葉以前に比べて、緩慢であった。（Nef, “Comparison”, pp. 208-209. 拙稿「18世紀のイギリスとフランスの経済発展—経済史における“比較”—」『商経学叢』第41巻第1号, 1994年, 106-107ページ。）

しかしこの時期にフランスがイギリスに常に利益を増大させ続けたのは、レース、絹、タピストリ、ガラス、金属、粘度、石で象る芸術的作品の様な富裕階層が得ることの出来た製品の製造分野であった。いわば芸術的に巧妙な技術の製品でゴシック時代の大聖堂とルネサンス時代から受け継いできた地位を一層強化した。（*Ibid.*, p. 210. 同拙稿, 107-108ページ。）

このような工業生産への傾斜は18世紀においても両国の生産に現れ、その特質を形作っていた。イギリスはフランスに比べ、18世紀初期から一人当たりのより高い平均所得とより高い生活水準が実現され、確実にイギリス人の衣食住の環境は良くなっていった。従って、暮らし向きのよい中産階級の数も多く、18世紀イギリス製造品のための平均需要は高い水準を保っていた。これらのいわば大衆市場に対してイギリスは工場での機械による大



量生産可能な安価な財を製造するのに専心した。他方、フランスは贅沢あるいは半贅沢品の製造業の相対的重要性がイギリスよりも大きく、従って上流階級や海外市場のための絹、クリスタル・ガラス、鉛、陶器、家具のような奢侈品工業が盛んであった。これらの製造業は機械化にはほとんど適さず、多くの労働を必要とし、小規模なものでさえも利潤を引き出した。これらの機械生産に馴染まない奢侈品工業をフランスの政策は振興することを目指し、フランスはまだこの領域で世界を主導していた。(F. Crouzet, *Britain Ascendant: Comparative Studies in Franco-British Economic History*, 1990, pp. 34-35. Do., "Some remarks on the matiers d'art", R. Fok and A. Turner eds., *Luxury Trade and Consumerism in Ancien Regime Paris Studies in the History of the Skilled Workforce*, 1998, pp. 263-264. G. Clark, *The Wealth of England 1496-1760*, 1965, pp. 169-170. ネフは17世紀後半から1740年代までフランス人は「生活に壮麗さや優雅さを付け加える芸術家や工芸職人の技能を要する製品の生産に集中した」[Nef, "Wars and the Rise of Industrial Civilization, 1640-1740", *The Canadian Journal of Economic and Political Science.*, Vol. 10 (1944), p. 38. Do., *War and human progress*, pp. 149 も参照]と中世以来のフランスの工業における特質が留められていたことを示唆している。18世紀のイギリス産業革命の本質の一つに工場制の採用を中核に置く近代工業の誕生を上げること[P. マントゥ、井上幸治他訳『産業革命』東洋経済新報社、昭和41年、24ページ]には異論はない。その近代工業の基本的な性質は標準化された安価な製品の大量生産にあるから、贅沢品が製造した業種はそれとは対照的に行き止まりとして考慮され、経済発展の幹線から完全に離れた所にあると考えられてきた。外国の低コスト生産者に直面しているフランスのような国は国内製造に含まれる資本支出を思い切って試みる危険にさらされるよりもイギリスの製品を購入することが好ましいと分かった["The Origins of the Industrial Revolution", *Past and Present*, No. 17 [1960], pp. 79-80].)

かつてネフや J. R. ハリスが16世紀から産業革命期までのイギリスの技術発展における石炭の重要性を「石炭燃料経済」や「石炭燃料技術の発展」という用語でうまく言い当てたが、イギリス産業革命の後半期を目撃したと思われる経済学者、S. ジェヴォンズもイギリスは「われわれが最近寄与したほとんどすべての技術や発明は石炭に関するわれわれの指示から生じる」(S. Jevons, *The Coal Question*, 1865 [1901], p. 69) という指摘でもって、イギリス産業革命期の技術が石炭を中心に展開していたことを示唆していた。イギリスは「18世紀中葉までわれわれは全体に熟練を要する製造業のすべてにおいて遅れ」(*Ibid.*, p. 70), また「われわれは取引や工業の基本的な操作において大陸の国ぐに非常に劣っていたため、書くまでもなく、生活のより贅沢な技術は全面的にこれらの国ぐに負うっていた」(*Ibid.*, p. 78) のである。これに対し、なかでもフランスは「今のようにガラス、帽子、紙、



帆の布、刀の刃、鋏、多くの鋼製のおもちゃのような製造業の多くの小規模な部門で極めて優れていた」（*Ibid.*, p. 78）と彼は記していた。ジェヴォンズより1世代ほど後の経済学者、ヘクシャーによると、18世紀フランスで砂糖の精錬、石鹼、紙、ガラス、鏡、陶器、家具、ロープなどの多くの製造業が成長し、これらの製造業は非常に多様であったけれども、疑いなく一つの共通の基本的な特性があり、それは公的な奨励の中心にあって、国家の援助に浴していた奢侈品製造業であったのである。これらの奢侈品製造業は以前よりもより優秀な技術的成果に、あるいは可能ならば、他の国よりも優秀な技術成果に到達するように注意が払われ、これらの奢侈品は他のヨーロッパの国々から妬みと賞賛をもって受け入れられ、やがて模倣された。（E. F. Heckscher, *Mercantilism*, Vol. one, 1935 [reprint 1994], p. 190.）このように16世紀以来のイギリスとフランスの両国に観察された生産の目標が19世紀前半にまで引き継がれている事実がはっきりと理解され得る。

ネフは16・17世紀のイギリス・フランス両国の生産に現れた経済的特質の推進者にも触れていた。この両国の推進者の特性がイギリスとフランスの生産の目標の著しい相違となって現れた。彼は当時、勃興してきたジェントリの経済活動がイギリスの初期産業革命を促進し、それにより彼らは富を獲得した（Nef, “Art”, pp. 301, 303-304. ネフ、隅田哲司他訳『一六・十七世紀の産業と政治—フランスとイギリス—』未来社、1958年、22、24-25ページ [以後、この著書は『政治』と略して引用する]）と1940年代の R. トーニーの周知のジェントリ論（R. トーニー、浜林正夫訳「ジェントリの勃興」トーニー、浜林正夫訳『ジェントリの勃興』未来社、1957年）を受け入れている。ジェントリとはトーニーに従えば、ヨーマンより上で貴族より下の土地所有者とこれに加えて、裕福な借地農や有名な法律家、僧侶、医者などの急速に増えつつあった専門職の人びと、そして富裕な商人などの階層を指していた（トーニー、前掲論文、13ページ）。そして彼はこうした新興のジェントリ層の16・17世紀の動向について次のように分析した。

「事態はまったく明らかであった。名門旧家は私的奢侈と政治的愚行によって滅び、ヨーマンの地位は16世紀末に長期的借地契約の満了とともにかたむき、国王の収入と権威は王領地の減少とともに失われ、これらの減収分をあわせてうけついでジェントリの財産のみが増大して、その総収入は、1600年においてさえ、貴族、司祭、副司祭、僧会、および富裕なヨーマンの全部あわせた収入の約3倍といわれ、しかもひきつづき、農民、貴族、教会、国王の手からすべりおちてくる所領をすべて集中におさめていく—こういう動向とそれのもたらす諸結果は、誰の目にも明らかであった。」（同論文、14-15ページ。トーニー、浜林正夫訳「ハリントンの時代解釈」トーニー、前掲書、121-122ページも参照。）

地主としての収入が減じ、企業家としての収入が伸びていくことを悟ったとき、進歩的

ジェントリ達は「商売やって儲けよう」を合い言葉に種々の事業に進出していった。彼らの商売の内容は非常に多様であったけれども、それらは主に土地経営の合理化と木材業や鉱山業などへの事業への投資に要約できた。(トニー「ジェントリの勃興」33-34ページ。)このように時代の動きに敏感な進取の精神をもったジェントリ層が生産・消費の両面から初期産業革命を支え推進し、物質的富とその結果としての国民所得の増加という巨大な達成を実現したのであった。(Nef, "Art", p. 300. トニーにしても、ネフにしても1540年から1640年のイギリス経済活動の推進者を考える場合に「より大きな資本と鋭い商才をかねそなえていた」[ハバカク, 川北稔訳「17・18世紀のイギリス地主層」『18世紀イギリスにおける農業問題』未来社, 1967年, 72ページ] 新興のジェントリに求めたことは周知であるが、この発想が「資本主義の成長は直線的に進行するような動きではなくむしろ別の原動力によって一すなわち相互に連続せずむしろ交替の結果として中断が行われるという形をとりながらもろもろの原動力の継起によって時代が画されている」[ピレンヌ, 大塚久雄他訳『資本主義の諸段階』未来社, 1964年, 56ページ。また同論文 9-10ページも参照] というピレンヌの有名なシェーマに由来していたことは確かである [Nef, "Dominance of the trader in the English coal industry in the seventeenth century", *Journal of Economic and Business History*, Vol. I (1929), pp. 424-426 やトニー, 浜林正夫訳「ハリントンの時代解釈」124ページを参照。])

しかしながらフランスでは重税を負担していたのは国民の最大多数に部分、主として農民や労働者などの貧民、商人、小売商、職人などの中産階級であり、彼らこそ食糧や燃料などの、可能性としての大工業の生産物の重要な顧客であったけれども、イギリスと異なっていて、安い家具、衣類、ガラス、日用食器、タバコなどのような、日常使用される工業製品の購買にあてることのできていた総金額は、緩慢にしか増加しなかったか、全く増加しなかったかであった。他方、納税負担を免れるかあるいは租税からあがる収益によって生活している貴族、国王や僧侶や武官貴族などの国民のうちの非常に権勢があり富裕な諸階層すべてが彼らの財産から多額をさいてイギリスの石炭産業や後述するガラス製造業のような量の追求を至上命令とする諸工業に対する投資意欲をほとんどもっていなく、イギリスで大いに要求されてきたような大量の低廉な日用品の購入に余剰の富を用いることにもほとんど関心を払わなかった。彼らの富の大部分を、美しい建築や自身を飾るのに必要な奢侈品および美術品に費やしたのである。(Nef, *Civilisation Industrielle*, p. 172. ネフ『工業文明』192-193ページ。ネフ『政治』205ページ。1570年から1620年の50年を観察するならば、イギリスの繁栄とフランスの貧困の対照的な経済状況に注意が引かれる。賃金稼得者の物質的な生活水準は明らかに16世紀後半の40年間に大抵の地方で大きく低下した [Nef, "Art", p. 300.] 16・17世紀の

フランス政府の工業政策もイギリスでは、工業の分野におけるほとんどすべての発明は、人手の節約、高価になった薪炭を安価な石炭の間にあわせることや、輸送費の節減などを目的としていたのに対して、芸術上の発明を奨励し、工業生産の質の完成のために働きかけた。（Nef, *Civilisation Industrielle*, p. 161. ネフ『工業文明』181ページ。）16世紀末から17世紀初頭にフランスで優勢であったのは、言葉の古い意味での質的な意味の発明であった。反対に、北欧とくにイギリスで見られたのは、言葉の近代的な意味での量的な発明へむかうところの、実用的な分野の発達であった。（*Ibid.*, p. 161. 同書, 180-181ページ。）

そこで今少し16・17世紀のイギリスとフランスのガラス製造業の比較をとおして、そこに観察できる両国が目指していた生産の目標の違いに明らかにし、イギリスにおける工業文明の生誕の経済史的意味を考えたい。

## 2 16・17世紀のフランス・イギリスのガラス製造業

### フランスのガラス製造業

フランスのガラス製造業とイギリスのそれを比較するとき、16・17世紀のヨーロッパで作られたガラス製品を異なった種類で見分ける必要がある。まず、教会や大聖堂やまたある程度までの城や公共の建築物の窓のためにデザインされた美しいステンド・グラスがあった。ガラスの嵌められた窓は12—13世紀のゴシック建築時代の遺産であったが、ガラス製造に用いられた方法は変化した。（Nef, “Comparison”, p. 152.）

14世紀以来ずっとガラスはヨーロッパ中で裕福な後援者のための美術品としてしだいにその量を増やしながら生産されてきた。16世紀初期までにガラス職人が彼らの美術的ガラス製品で特別の名声を獲得した3国があった。その一つはイタリアで、ゴブレット、デカンター、水差し、壺、美術的な枠を施した鏡がヴェネチアやジェノアの近くのアルタレーデで制作され、美とデザインの優雅さに無敵の名声を享受し、それはカルヴァッチョやベリーニなどの油絵作品と同じくらい当時の富裕市民の生活を魅力あるものにした。とりわけイタリアのガラス職人は広くクリスタルとして知られる特別な透明度をもつガラスが15世紀後半にヴェネチアで発明され、その生産で有名であった。これをもって彼らは最高の優雅な製品を作り出したのである。他の2つの地域はボヘミアと彩色ガラスで注目されたフランスの北東部のローレンヌであった。（*Ibid.*, p. 152. Nef, “Industrial Europe at the time of the Reformation, ca. 1515-ca. 1540”, Do., *The Conquest of the Material World*, 1964, p. 100.

Nef, *Civilisation Industrielle*, p. 25. ネフ『工業文明』26ページ。ネフはまたガラス製造の「工業分野では彫刻や絵画におけるとほとんど同じくらい、芸術性が重んじられた。かれらはガラスの上に絵を

描いたのであり、かれらステンドグラス職人とドナテロないしデルラ=ロップピアのような芸術家のあいだには、ある類似点があったのである。後者が、彫刻において、いわば、石のうえに絵を描いた—あるいは少なくとも、石で絵をつくりあげた—のと同じだったわけである」〔*Ibid.*, p. 25. 同書, 26-27ページ〕と指摘している。)

1540年ころから始まる1世紀間のフランスガラス製造業の歴史はイタリアのガラス工によって建設され使用された炉によるガラス製品と時たまローレンヌの熟練工の助けを借りる土着の職人によるより粗悪なものの製造に分けられる (Nef, “Comparison”, p. 153. 前掲拙稿, 108-107ページ。)

イタリアのクリスタルガラスの製造はイギリスにおいてよりもフランスで適した土壌が多く見出され、多くのイタリア職人はフランスの広範の地域でガラス製造場を開設した。ヴェネチアのクリスタル・ガラスは早くも1511年にリヨンで生産されていた。フランス北部および西部で1550年以降イタリア人によってか、あるいは彼らの監督下でゴブレットが吹き出された。次の60年間に大きな鏡を除いてあらゆる種類の優良なイタリアモデルのガラス製品の生産を目指した多くのガラス製造場がサンジェルマンレイ、ロウエン、サンジェルマンデブレ、リヨンで開かれた。これらの新しい施設のガラス製造業者はつねに主に宮廷や最も富んだ階層に望まれた最も優雅な美術品を製作していたとは限らなかったが (*Ibid.*, pp. 153-154), 実際に美術的ガラス製品はその市場の限られた性質とそれを作るときに必要とされる際だった熟練のためにわずかしか生産されなかったに違いない。おそらく普通の窓ガラスや瓶やあらゆる種類の粗悪なガラス製品の生産量をそれと比較することはほとんど重要でない。反対に、このような製品の生産は後述で明らかになるように、イギリスで大きく増大した。それは宗教改革後にエリザベス1世ととくにジェームズ1世時代に貴族と同様に商人的本領が急速に浸透した商人や彼らの召使いの間で快適さと便益さを求めてガラス製品の需要が増加した結果であった。 (*Ibid.*, p. 155.)

フランスでは安価な種類のガラス生産の成長は国王や宮殿や貴族の城を飾る優雅な水差しや皿、花瓶、鏡のそれよりも目覚ましくなかった。一般に、こうしたフランス社会によって生まれ成長してきた優雅さをもったイタリアモデルの美術的なガラス製品は経済的余裕がある貴族や裕福なブルジョアによって好んで購入された。また16世紀初期に普通のガラス瓶、鉢、ランターン、コップなどは窓ガラスとともにフランスのどの地域でも小さな炉で製造されていて、これは新しいことではなかった。それらは常に燃料を提供する森林地帯に建てられ、その製品は極端に近代的工業のものに比べ、粗悪であった。フランスにおいて1540年からの100年の間、それ以前から発展していたふつうのガラスの生産の成

長は持続されてきたが、その成長は際だって急速ではなかった。しかし明らかに窓ガラス、瓶、安価な花瓶は長い間これまでそれらをもたないで生活してきた家庭の間に次第に拡大しつつあったことも事実であった。(Ibid., pp. 155-156, 157.)

### イギリスのガラス製造業

16世紀前半に刊行されたかの *A Discourse of The Common Weal of This Realm of England* (『イングランド王国の繁栄についての一論』)の著者は当時まるっきりなくても済ませるか、国内でもつくれるような、ずいぶんつまらぬ品物が、どっさり海外から入ってくるものとして「鏡やコップや窓ガラスなどのガラス類」を真っ先に挙げていた (*A Discourse of The Common Weal of This Realm of England*, 1581 (reprint. 1893), pp. 16, 63. 「イングランド王国の繁栄についての一論」出口勇蔵監修『近世ヒューマニズムの経済思想』有斐閣, 昭和32年, 16, 68ページ [以後, この翻訳書を『繁栄』と略して引用する]。しかしこの作者は国内に財宝をもたらす職業としてもガラス製造を挙げ [Ibid., 127. 『繁栄』138-139ページ], 「こういう技術がおこなわれていなければ, それを育成するのがよいと思います」 [Ibid., p. 127. 『繁栄』138ページ] と指摘していた)。中世において「われわれが考慮する大抵のガラスはより大きな都市のガラス職人をとおしてもたらされた。しかしどの程度彼らが自ら製造していたかを断言出来ない。とくに彩色ガラスの相当な量は輸入された」(L. F. Salzman, *English Industries of the Middle Ages*, New Edition, 1970, p. 188. イギリスの簡単なガラス製造の歴史に関しては R. Dodsworth, *Glass and Glass-making*, 1982 を参照)。実際, イングランドで中世をとおしてガラスは瓶のような容易に壊れやすい質の悪いものが少量であったが, 製造されていた (S. M. Jack, *Trade and Industry in Tudor and Stuart England*, 1977, p. 91)。

しかしながら1540年から1640年の100年の間にその状態は変化し, 窓ガラスの国内製造の最初の大きな発展と種々の安価なガラス製品の生産というフランスのガラス製造とは異なった形のガラス製造業の発展が看取された。安価な窓ガラスの製造のための炉は1560年代にサセックスに建てられ, 次の20年の間に窓ガラスと瓶, コップ, 水差し, ランターン, めがね, レンズなどの一般日常生活で用いられるガラス製品との両方の生産の大きな成長が起こった。さらにジェームズ1世までにガラス製造業は桁外れに拡大したので, 窓ガラスは貴族, ジェントルマン, 富裕な商人と同様に一般にヨーマン, 小商店主, 職人の住宅で一般に見つけれ, それらはすでにフランスよりも一般的であったと見られる。(Nef, "Comparison", pp. 157-158. Do., *The Rise of the British Coal Industry*, Vol. I, p. 152.)

こうしたイギリスのガラス製造業の発展を導いた大きな要因の一つにこの製造業におい

でも薪から石炭へ燃料の切り替えが挙げられる。ガラス製造業も他の製造業と同様に16世紀後半から深刻な木材燃料不足に直面し、豊富に存在する石炭燃料の採用が促された。しかし石炭のもつ化学的特性が原料に有害であったために、採用のためには既存の何らかの技術の改善が必要であった。

そこで1612年以前にガラス製造は木材燃料を石炭に代替させ得るために、灰汁と砂が溶解される粘土の坩堝を密閉する製法の発明をとおしてかえられた。この製法は原料が石炭を燃やすときの有害なガスや炎からの接触を防止するために、密閉の坩堝のなかで熱せられるもので、以前より大量の平らな窓ガラスのような製品に役立つ板ガラスの生産を容易にしたが、大陸のガラス職人達が熟達していた技術であった炎のなかでガラスを吹く方法には適さなかった。(Nef, "Technology and large-scale industry in Great Britain, 1540-1640" Do., *The Conquest of the Material World*, 1964, p. 134. Do., *Cultural Foundations of Industrial civilization*, 1960, p. 52.) こうして高価な木材燃料に代わって安価な石炭がガラス製造と結びついた。17世紀初期にロバート・マンセル卿はこの新技術を携え、安価な石炭を求めて、ロンドンから遠く離れたタイン川沿いにガラス製造場を建設した。(J. Brand, *The History of Newcastle*. vol. II, 1789, pp. 42-43.) ニューカスルはこの世紀にイギリスの主要ガラス生産地のひとつとなり (Nef, *The Rise of Coal Industry*, vol. I., p. 228), それは「ガラス製造場では窓用の板ガラスが製造され、その板ガラスは王国の大抵のところに供給される」(Grey, *Chorographia, or a survey of Newcastle Upon Tine*, 1649, p. 40) と記されるまでに発展したのであった。石炭に燃料を転換した事実が日用品である板ガラスの大量生産を可能にし、ガラスをかつての贅沢品である美術工芸品から安価な一般大衆品に仕立て上げ、イギリスでは窓にガラスを嵌めるのを普通のこととなった。17世紀初期にフランスのリヨンを訪れたイギリスの聖職者はこの地で窓が白紙で覆われていたのを観察して驚嘆していた。

「私は建物の窓の大抵が白紙で作られているのに気が付いた。この町の多くのところで窓全体は白紙のみで作られている。部分的に窓の下方が白紙で、上方がガラスからなる窓もある」(T. Coryat, *Coryat's Crudities*, Vol. I, 1905, p. 204)。

イギリスから来たこの聖職者にとって住宅の窓は板ガラス製が普通であったのであろう(イギリスはヨーロッパのなかで紙の普及が遅れていて、15世末ジョン・テートがハートフォードシアで紙の製造を着手したのが最初である。そしてイングランドの製紙工業の実質上の確立は17世紀まで待たねばならなかった。そのきっかけは17世紀後半に生じたユグノー職人の移住に求められている。17世紀初期イギリス人聖職者が見たフランスの窓への紙の利用はこうしたイギリスの製紙業の現実を

考慮されるべきである〔拙稿「イギリス製紙業と産業革命—M. クープスの著作を中心に—」『商経学叢』第49巻第2号、2002年、152-153ページ〕。また彼は当時のフランスの窓について「フランスの大抵の所で窓はイギリスのものと異なっている。……窓にはいくつかのボルトで連結された木製の折れ戸が付いており、……全くガラスなどが嵌められていない窓の下の部分で非常に快適な外の空気が吸える。大抵普通閉められている窓の上方はガラスや格子造りになっている」(Ibid. p. 197) と書き残していた。

粗悪なガラス用の炉はイギリスよりもフランスで17世紀の30年代、なお多くあったが、それらは普通小規模であった。木材燃料に代えて石炭の使用は以前よりもより大きな量においてガラス生産を促進した。もともとイギリスのガラス製造はシェイクスピア時代以前にはフランスと比較すると、ほとんど重要ではなかったが、その後急速に成長して、17世紀末までにイギリスは明らかに他のヨーロッパの国々に窓ガラスや瓶の生産で先んじていたと思える(Nef, "Comparison", p. 158)。フランスではガラス製品は中世やルネサンス教会のように、美意識を刺激するものであったのに対して、イギリスでは人々を気候から保護するためにあった(Nef, "Art", p. 288)。

16世紀に『イングランド王国の繁栄についての一論』の作者はイギリスで育成すべき大陸で開花した技術の一つにガラス製造業を挙げていた(*A Discourse of The Common Weal of This Realm of England*, p. 127. 『繁栄』138ページ)。このガラス技術は16・17世紀をつうじてフランスとは異なるガラス製造業の領域でこの国で発展し、17世紀後半にはイギリスはガラス製造業で「オランダをはじめヨーロッパのどの国よりも先に立っている」(*The Mischief of the Five Shillings Tax upon Coal*, 1699, p. 22) までに成長していた。その発展の原因は何よりも廉価な石炭に求められ、17世紀末の

「ガラス製造における石炭への負担は少なくともあらゆる種類のガラス製造で全体の生産費の5分の1である。しかし粗悪な窓ガラスや瓶のガラスでは同じ量が石炭生産地域において20シリングで作られるのに、ロンドンのガラス製造業者は16ポンド以下では不可能である。彼らが躊躇いもなく北部へ移動するか、イギリスを去らなければならないと言っているのを私は疑わない。……彼らは世界のすべてに先んじ、オランダを完全に、そしてほとんどすべての近隣の諸国をガラス製造業からたたき出した。これが出来たのは石炭の安価さの利益によってであった」(Ibid., p. 22)

という記述がその事情を物語っていた。この時期までにイギリスの石炭は羊毛に替えられるほどで、「イングランドの羊毛なしには織物が製造されないように、イギリスの石炭のすべてか一部がなければ、ガラス製品も粗い鉄製品も製造され得ない」(Ibid., p. 24) と評価



されるまでになったけれども、この石炭燃料への切り換えが美を追求する奢侈品製造業からイギリスを後退させたのも確かである。

以上、フランスとイギリスの製造業の比較の結果、概して、1540年から1640年の間、人口に比較して工業生産量はフランスよりもイギリスで遙かに大きかったと結論しても大過ない。イギリスは石炭、明礬、ビール、毛織物、銅、ガラス、船、タバコとタバコのパイプ、鉄、真鍮、金属製品、煉瓦や石灰のような建材、石鹼、糊、普通のガラス等の生産においてフランスを凌駕していて、それはイギリスが低生産費と生産増加を目論んだ技術進歩に関心を示すようになった結果であった。他方、フランスはゴシックの大聖堂およびルネサンスの時代から引き継いだ芸術的熟練をレース、絹、タピストリ、芸術的で精巧なガラス製品、石や金属や粘土を原料とした製品の生産によって高めたのである。(Nef, "Comparison", p. 210.)

とりわけ1540年から17世紀後半にかけてのイギリスとフランスのガラス製造について点検していくと、両国の生産の目標に顕著な対照が認められた。本来、美術品であり、奢侈品であったガラス製品がイギリスでは石炭を使用することによって日用品に変わり、板ガラスのような製品が上流階層のためではなく、ごく一般の家庭のために大量に生産された。他方、フランスで中世以来の美の追求を重んじるガラス工芸の伝統が守られ、主として上流階層の使用のために芸術的なガラス製品が製造された。ここに見出されたそれぞれの国の工業製品の特性がそれぞれの国が基礎を置いている文明の特質に根指していることが理解され得る。次にイギリスにおける工業文明の誕生がこの時代のこの国の美術の停滞とどのように関わっていたかを検討することになる。

## II. 16・17世紀のイギリスとフランスの絵画

このような16世紀後半から17世紀前半にイギリスとフランスにはっきりと看取できた工業生産の目標の相違、またそれに起因する両国の経済状況の相違が美術の発展にどのような影響を与えたのかとネフは問いかける。実はこのテーマこそ彼の1943年に発表した論考、「フランスとイギリスの美術、1540—1640年」の主旋律を彩っていた。今暫く、ネフの捉えた1540年から1640年のイギリスとフランス両国の美術について絵画作品を中心に考え、一般にイギリス人が当時、美術にあまり関心を示さなかった理由を探り、この事実と工業文明の誕生との関連を明らかにしたい。

伝統的な諸産業に対する規制からの自由と17世紀初期の国富の著しい増加は他のヨー

ロッパ諸国の間でオランダのみがイギリスと分かち合えた条件であった。これらの条件はイギリスで既に実現されていた新しい一層な個人的な文学の開花にとって重要であったが、新しい一層個人的な絵画の開花のためにも、同じくらいに重要であったはずである。しかしながらイギリス人は絵画における成功、つまり芸術的効果を生み出すための材料を混合し、配列するような手先を用いた繊細な仕事への卓越した才能に欠くことのできない別の条件を持ち合わせていなかった。また、ヘンリ8世による宗教改革の実施でこれまで宗教的施設をとおして示された芸術的技芸に専念していた工房や作業場への関心は奪われ、これらの場所で製作されていた作品への需要は廃れてしまった。先述した初期産業革命の時期にイギリス人が芸術的職人としてフランス人を追い越すように促す要因は何もなかったようである。エリザベス時代において、重大な変化のなかにいた人びとによって感じられた感情表現の必要はほとんど完全に文学の形になって現れた。内容はフォルムより重要であったため、エリザベス時代の人びとはまず表現の最も直接的な手段を選択したのである。それが言葉であり、次に言葉を補完するものとしての音楽であった。絵画は音楽のように詩の補完物であり得なかったのである。そして劇作家や作曲家のために観客を提供したのが先述したジェントリのような新興の裕福な階層であった。従って、絵画は詩や音楽や戯曲に示された偉大さに匹敵するように優れた流派をこの国の16・17世紀には生み出せなかった。例えば、イギリス人はなんとかその時代の主要な人物の幾人かの素晴らしい感銘を与える肖像画を描いたが、これらの肖像画は芸術作品として記憶されるべきものではなかった。1500年から1615年に生まれたどのイギリス人の誰もが美術史に残るような画家にはなれなかったし、イギリス音楽とは異なって、その絵画はヨーロッパ大陸の美術に影響を与えなかった。実際、われわれにまで伝えられた肖像画を描いた大方のイギリス人はもともとフランドルやオランダ人を示唆する名前をもっていたし、ホルバインやヴァン=ダイクのような偉大な芸術家がヘンリ8世やチャールズ1世の宮廷画家になり、国王の姿をわれわれに伝えたのであった。これは部分的にはこの国の絵画の才能が枯渇していたことを率直に物語る。事実、彼らがイギリスを去ったときに、イギリス美術家から学んだ何物も持ち去らなかつた。(Nef, "Art", pp. 288, 291-293, 304. トレヴェリアン, 藤原浩他訳『イギリス社会史』1, みすず書房, 1971年, 136ページ。16・17世紀のイギリス美術を、「15世紀に入ると、イギリスはルネサンスの開花させたイタリアをはじめとするヨーロッパ大陸に対して、文字通り『周辺』となり、16世紀にはもっぱらドイツのホルバイン、イタリアのトリジアーノなど、外來の画家や彫刻家の活動の場を提供することになる。この状況は基本的には17世紀にも変わらなかつた」[高橋裕子「17世紀のイギリス美術」坂本満他編『世界美術大全集』第17巻, 小学館, 1995年, 379ページ]

と一般的に評価しても誤りはないであろう。) このようにイギリスはエリザベスと最初のステュアート2王の時代に世界で最も美しい若干の詩と劇、イギリスで書かれた最も優れた散文作品、最も愛すべきイギリスの歌曲を世に送った。この国はおそらく1540年から1640年までの100年間は詩や文学において他のヨーロッパの国々の絵画と同じくらい偉大であったと言える。レンブラントが絵画の完全な世界を創出しているように、シェイクスピアに詩や劇の完全な世界を発見できる。これに反して、この時期の絵画・彫刻およびあらゆる装飾美術は不毛であった。まさにイギリスでフランスよりも多産でなかったのはこの奢侈品・美術工芸産業に関しての領域であったのである。従って、イギリス人は卓越した美術、とりわけ絵画において西洋美術史上ほとんどその支配的な役割を果たさなかったと言える。(Nef, "Art", pp. 288, 291-293, 304. ネフ『政治』140ページ。)

だが、16世紀後半から17世紀前半のフランス絵画の状況はイギリスとは対照的であった。

16世紀にヨーロッパ絵画は工芸であることを止め、それは芸術になった。職人技芸と自由学芸の間の中世の壁が弱くなっていくにつれ、絵画と、究極的には造形芸術は職人的職業として見なされなくなって、普通の職人の作業場の訓練と方法からの独立を獲得した。それらはまた中世の神学やスコラ哲学からある程度の独立も得たのである。詩人や散文作家の作品のように絵画作品は中世において保持しなかった自信を身に付けつつあった。ジョットの絵は彼の時代の彫像やステンド・グラスの窓と同じように修道院や教会のような大規模な建設の一部として概ね計画されていたが、16世紀の画家の作品はしばしば彼のパトロンや絵の購入者が絵を掛けるのに適当な所と考えた場所に吊された。それらの多くはいかなる特別の背景を考慮することなく描かれ、画家の仕事は次第に彼のキャンバスの四隅のなかの空間に限定されるようになっていった。作品は画家がテーマをもって空間内に色彩と構図の調和を生み出したときに完結したのである。この空間のなかで彼の作品は中世の親方のそれよりも自由になり複雑になった。彼は主題とフォルムの点から制限が緩められたわけである。個人主義と物質主義の時代は、主題のより文学的でより具体的な扱いという意味で文学と同様に絵画においても、現れ始めたのである。(Ibid., pp. 281, 291. 中世における職人が美術家の手腕と職人芸の両方を兼ね備えていた例に、ネフはルビー・ガラスの制作を挙げていた。「職人の技芸と美術家としての手腕はたいていの手による作品で結び合わされていた。例えば、12・13世紀に職人は大聖堂の窓において宝石がちりばめられたモザイク模様必不可欠部分を形作っているルビー・ガラスとして知られる一種のガラスを美術家風の試みによって何とか創り出した。」[Nef, *Universities look for unity*, 1943, p. 15].)

レンブラントは言うに及ばず、ヴェロネーゼ、ティトレット、グレコ、ヴェラスケス、ルーベンス、ファン=ダイク、ハルズ、ピーター=ブリューゲル（兄）のような当時の外国の巨匠の作品に及ばなかったと言う点で、1540年に続く100年はフランス絵画史において輝ける時期として見なされ得ないが、フランス絵画はそれ以前も以降もイギリスのそれよりも優れていた。イギリスの芸術が文学と音楽で最も偉大な可能性を実現していたその時に、フランスでは衰退しつつあった中世後半の古い美術に影響されながら、その後、ルイ14世の時代に新しい古典美術の開始の波が押し寄せてきた。最も偉大なフランスの画家は1545年にフランソワ1世の宮廷画家、次いでアンリ2世、シャルル9世に仕え、当代随一の画家として重んぜられたフランソア=クルーエ(Francois Clouet 1522-1572. フランドル出の有名な画家の3代目であった)であり、さらにニコラ=プッサン(Nicolas Poussin 1594-1665)であり、クロード=ロラン(Claude Lorrain 1572-1682)の名があげられる。プッサンとロランのいずれもが画家としての形成期をイタリアに滞在し、1640年になってリシュリーによって宮廷画家になるように呼び戻されたが、終生、母国に帰ることはなかった。(Ibid., p. 293.)

フランソア=クルーエの肖像画は、常に名前は残っていないが今もフランスの地方の美術館の壁のあちこちに掛けられている16世紀の最後の30年間の画家による多くの肖像画には見られない構成と生命力に際だった力量を示した。1572年のクルーエの死以降、1615年までの約半世紀の間、フランス絵画は不毛な時代であったと記しても差し支えない。(Ibid., pp. 293-294.)

16世紀後半においてもフランス絵画はなおも工芸であると考えられ、ほとんど職人技芸に近かった。それゆえ、美術における伝統はなお職人の伝統で、親方職人が装飾の施した錠前や鉄製の手すりを提供するように望まれていたのと同じように、美術作品を差し出すように要求された。美術と工芸に線が引かれていなかったのである。もしフランスの絵画がこのままクラフトに留まっていたら、復興できなかったであろう。絵画は強力な宮廷の支援を受けて音楽や文学のように芸術にならなければならなかったのである。(Ibid., pp. 295, 296.)

1589年から1610年のアンリ4世の治世に生まれた世代が成長したときにフランスの画家の社会的地位とその絵画の質に変化が起きた。この治世のフランスでその作品が芸術として今も展示する価値があると考えられている多くの画家が生み出された。終生母国に帰らなかったプッサンとクロード・ロランは別にして、ラ=トゥール(Georges de la Tour 1593-1652)、フィリップ=ド=シャンパーニュ(Philippe de Champagne 1602-74)、シモン=ヴェー

(Simon Vouet 1590-1649), ル=ナン 3 兄弟 (Le Nain), ル=ヴァレンティン (Le Valentin) はいずれも1589年から1610年の間に生まれ、1643年に終わったルイ13世治世下の大部分の間のフランスで創作活動をした。ルイ13世治世時代に絵画は伝統的な古い熟練によって育てられることを止め、新しい画家のギルドから、別言すれば1643年に設立された絵画国立アカデミーから支持をひきだすようになった。絵画も文学や音楽のように、宮廷によって育まれたのである。そして宮廷は作品のこごとく形態を、とりわけ創造的な作品を規制するようになった。(Ibid., p. 296.)

芸術家や批評家の間でルイ13世治世の画家の創造力に関する評価が異なっているが、どのような偏った判断に従っても、ブッサンとクロードの、あるいはワトーとフラゴナールの、アングルとドラクロワの、セザンヌとルノアールの時代が偉大なそれであった言う意味で偉大な時代の一つとして評価される (Ibid., p. 297)。

これらのルイ13世治世のフランスの画家たちがフランス絵画の将来に果たした影響は彼らによって得られたどのような結果よりも重要であった。彼らは同じ時代の頃に公式化された詩や音楽の方法がのちのフランスの詩人や音楽家に役立ったように、彼らの後継者に役立つ美術のための方式を確立していた。しかしルイ13世治世下の最良の美術家であるシャンパーニュもラ=トゥールもこの方式の確立の先導者にはなり得なかった。ラ=トゥールの作品は20世紀までフランス絵画研究においてほとんど完全に無視されてきたからである。しかしシモン=ヴーエはシャンパーニュやラ=トゥールよりも十分な成果を發揮しなかったが、フランス絵画史において古典的フランス様式確立者として位置づけられた。それは詩におけるマレルブや散文におけるバルザックによって占められた位置と同じと言ってもよいくらいであった。このような意味で、ヴーエは絵画の最も偉大な教師の一人であったと認められる。(Ibid., p. 298-299.)

実際、ヴーエには彼のスタディオで学んでいる若い画家達に技術の原理を伝える比類のない才能が備わっていたようである。彼の弟子の一人がル=ブラン (Le Brun 1619-90) はルイ14世治世下で絵画と意匠美術の名匠になって、ヴーエから修得したものを彼の世代の大部分の美術家達に伝えた。ル=ブランはまた絵画アカデミーの設立に尽力し、コルベールによってゴブラン織りの制作の監督に指名された。ル=ブランは宮廷の保護のもとに彼が獲得した芸術的技術の方式をすべての工業美術に応用するために何十人の弟子の訓練にとりかかたのであった。(Ibid., p. 299.)

以上、ネフに従って、主に16世紀後半から17前半のイギリス・フランス両国の西洋美術史における鋭い対照を、換言すれば絵画の領域の両国の貢献に関して論じてきたが、要す

るにこの時期にイギリスでは「絵画は相変わらずヴァン=ダイクのような外国人に依存していた」（高橋裕子他「バロック美術 ロココ美術」高階秀爾監修『西洋美術史』美術出版社、2002年、113頁）という言葉に象徴的に表れているように、美術の領域は文学に残したイギリスの功績に比較して、ほとんど主導的な役割を担えなかったと判断出来る。それに反して、フランスにおいてこの時期にこれまで工芸の一部と見なされていた絵画は工芸から独立して、それは芸術として確立され、国家の手厚い保護のもとに、ブッサン、クロード=ロラン、ラ=トゥール、フィリップ=ド=シャンパーニュ、シモン=ヴァーエ、ル=ナン3兄弟、ル=ヴァレンタン、ル=ブランなどの画家が16・17世紀に途切れなく現れ、輝かしいフランス美術史を築いていった。イギリスには同時期にこれらのフランスの画家に比べられるべき画家はいなかった（Nef, *Civilisation Industrielle*, p. 218. ネフ『工業文明』246ページ）。

こうした両国が示した対照の背景に所得の分配と国王および議会の産業に対する政策の相違があった。イギリスでは1540年から1640年の間の産業革命に喩えられほどの経済発展を主として新興の商人を含むジェントリ層が担い、そこから得られた富もトニーやネフが指摘したように彼らジェントリの手集中し、量の追求を目標とする工業文明を生誕させた。この場合、イギリスの「政府関与の試みは、その効用性により必要とされる物品の製造に限られていた。イギリスの画家・彫刻家・綴織り職人・陶器製造および装飾芸術に携わる人々は、王立仕事場や助成金の援助なしに精一杯やっけて行かなければならなかった。イギリスで17世紀に、フランスの諸流派に比べ、絵画・彫刻的芸術ならびに意匠技術に関して取り上げて言うほどの発展しかなかったことは、かかる領域における政府干渉からの解放が、それらにとって別に有益でなかったことを示唆するものである」（ネフ『政治』202-203ページ）。従って、18世紀になって、「中世以来初めての、地方的地位に甘んずることのないイギリス画派の台頭」（H. M. ジャンソン、村田潔他監修『新版 美術の歴史』2、美術出版社、1990年、561ページ。Nef, *Cultural Foundations of Industrial Civilization*, p. 135）を可能にするのである。

反対にフランスでは、産業に対する政策は、熟練した手仕事による極めて美しい奢侈品の制作や美術品の創作において、究極まで推し進められた。このような領域では、政策の主目的はその効用性によって価値ありとされる物品の大量生産にあったのではなく、職人技量の高度な美的水準の発展と、主として、またしばしば、その美のみによって評価される物品の生産であった。芸術家のために王立仕事場に新しい設備を整えることによって、国王は彼らを芸術家の働きを手工業労働者と同じ範疇に置いていた中世ギルド制度への従属から解放した。こうして芸術を育成することでフランス国王は、芸術家に極めて榮譽あ

る地位を提供したのである。このようなフランスの政策は同時代のイギリスの様な重工業の発展にとって有害であったのと同じ程度に、美の目標としてなされるあらゆる手仕事にとっては好都合であった。(ネフ『政治』202-203ページ。)

### Ⅲ. 質を追求する文明としての建築と経済的剰余

ネフは製造業や家庭の燃料として石炭の採用されたことを契機に16・17世紀に工業文明が誕生したと主張したのであるが、その工業文明がイギリスにもたらした別な経済的側面は石炭の採用に伴うイギリスの製造業の大がかりな発展が生産部門への投資対象を生み出したという事実である。炭鉱業、石炭業、製塩業、ガラス製造業などで見られたように、事業の拡大や石炭使用に基づく技術改善に大規模な資本を必要とした(例えば、イギリス石炭産業の場合、差し当たり、Nef, "Dominance of the trader in the English coal industry in the seventeenth century", pp. 425-426. Nef, *The Rise of the British Coal Industry*, Vol. II, pp. 4. 5. A. Moller, "Coal-mining in the seventeenth century", *Transactions of Royal Historical Society*, vol. 8 [1925], p. 85などを参照)のである。もともと工業経済への変遷過程で非生産的な資本の使用から生産的なそれへ推移することは経済社会の重要な側面であった(P. Deane, "The Industrial Revolution in Great Britain", C. M. Cipolla, *The Fontana Economic History of Europe*, 4(1), 1973, p. 196)。従って工業文明が勃興する以前の経済社会、別言すれば、農業を中心とする前工業社会では「実際、潜在的な貯蓄の大部分は資本投資の非生産的な種類へ充てられた」(*Ibid.*, p. 196)のである。

以前、ハイルブロンナーは社会に対して生産と分配に課せられた厳しい経済問題を解決する方式として伝統による経済、指令による経済、市場による経済の3つの類型が存在していたし、現在も存在すると主張した。これらの方式のうち伝統による経済と指令による経済は歴史的に古い系譜をもち、とりわけ指令による経済的支配は権威主義的な方法で伝統による経済と重なり合いながら果たされていたこと多かった。ピラミッドや寺院の建設、古代ギリシアや古代ローマの神殿の建設や土木事業、中世の大聖堂の建立などはこの指令による経済の方式によって効率よくなされてきた例であろう。(R. L. ハイルブローナー、小野高治他訳『経済社会の形成』東洋経済新報社、昭和47年、24、18ページ。)

このような資本が非生産的なものに投入され、指令による経済で創られた代表的な建造物の一つが今、例示した中世の大聖堂であると考えられる。ネフに従うと、建築はそれぞれの時代の生活と相互関連する全局面を表現しているとものであり(Nef, "Architecture and



Western Civilization”, *Review of Politics*, vol. VIII [1946], p. 192.), 西洋建築史において一つの確かな統一をもった最初の時期を彼は12世紀初期に始まったゴシック建築の時代に設定した (*Ibid.*, p. 194)。ネフは大聖堂が盛んに建設されたゴシック時代とその建築を次のように捉えた。

この頃に十字軍遠征が起り、旅が盛んになり、財の、知識の、思想の交流が行われ、全キリスト教徒が結束するという強い意識がお互いにヨーロッパ人を結びつけるようにした。彼らの創造的な生活は各々それぞれ異なった方法でもって共通の信仰の結合を強化する政治、知識、欲喜、芸術の相互依存性を表した。またそれは非常に複雑で急速に変化する文明のすべての本質的な局面にそれぞれ違ったやり方と言葉（知識）や石（建築）やあるいは他の物質において住民に分かり易い一体化された関係へ組み入れようとした試みを表していた。その関係に永遠の生命における人間のための共通の目的が具現化されていたのである。そして建築の偉大な時代としてのゴシックは根本的に異なった建築の概念が現れなかったと言う意味で、15世紀初期までの400年ほど続いた。 (*Ibid.*, p. 194. ネフはゴシック建築時代の開始の時期を同じ論文の194ページで12世紀初期に設定している。その時期から400年続いたとするとその終期は16世紀初期となる。ゴシック時代区分に関して岩井茂昭氏はトマス=リックマンの研究を援用して、中世ゴシックの終焉の時期を16世紀前半とされている〔岩井茂昭「ゴシック・リヴァイヴァルとゴシック・サヴァイヴァル—ジャコビアン・ゴシック様式と大学建築をめぐって—」村田隆美他編『中世主義を超えて—イギリス中世の発明と受容—』慶應義塾大学出版会、2009年、158-160ページ。〕) また、ゴシック建築の時代は芸術問題と技術問題は分離されていなく、芸術も工芸も一体であった。職人の作業場の方法と訓練は美術を含む事柄でもってなされたすべての作品に及んだ。美術と職人技能は不可分であって、それらはパンや飲み物と同じくらい生活にとって本質的であった宗教によって深く影響されていたのである。事実、建物の内部を構成する窓や彫像や他の芸術品のために聖職者および共同体によって定められた設計明細書は非常に厳格で微細に渡っていた。ヨーロッパ人はキリスト教の信仰で、時間と空間とモノを凌ぐキリストが人間の最後の目的として啓示した永遠の信仰で統一されていた。主要な建物とそれらのおのおのの細かい部分は多種の方法でこの人類の精神の共通の目的を表し祝福していた。男女は一般に建物の設計仕様書や、あるいは、少なくとも彼らが置いていた知識と信仰の背後にある意図を分け合っていたので、その設計仕様書は職人にとってめったに足かせとして現れなかった。それらは彼が直面する選択が非常に多くあるときに、当惑し苦しめさえしそうである普通の人間の真に知的で精神的自由に寄与する枠組みを提供した。芸術的な考えが広がる余地が設計仕様書にはあった。 (*Ibid.*, pp. 198-199. Nef, “Art”, p. 281.)。

ゴシック建築の勃興はヨーロッパ人の連帯意識を成長させていく意味と、単にわれわれが宗教的と呼ぶ部分的なものではなく生活全体を包含した彼らの共通の目的とが反映されていたのである (Nef, “Architecture and Western Civilization”, p. 199)。ヨーロッパ人は共通の永遠の信仰であるキリスト教で統一され、その高い精神性が教会の建造物、とくに大聖堂に永遠の生命を実現した (*Ibid.*, p. 199. 中世において大聖堂と市壁と切り妻の住宅はすべて関連し合っていた。大聖堂の中央入口にある彫像や柱の内側彩色ガラスの嵌った窓、尖塔などは一つ一つ全体の部分であった [*Ibid.*, p. 199])。信仰と美術の結合は宗教の伝統的機能の一つであったのである (Nef, *Civilisation Industrielle*, p. 151. ネフ『工業文明』168ページ)。それゆえ宗教と中

世の人びとにとって大聖堂は当時の精神と物質の両面の具体的な表現であり、ネフが提唱した工業文明誕生以前の文明の本質である質、換言すれば美の追求が典型的に具現化された姿であったと言える。大聖堂の建設によって、職人も15～16世紀には職人から自立していく画家も一体となり、建物、彫像、壁画、ステンド・グラスなどの工芸品から構成された美の総合をなし得たのであった。

トレヴェリアンはイギリスの大聖堂への思いを鮮やかに描写している。

「教会建築の連綿たる—しかしたえず動いている—伝統は、あいかわらずその堂々たる歩みをつづけ、古代の建築も近代の建築もまったく敵し得ない美しさと大きさをもった、数知れずそびえ立つ石造建築をイングランドに残した。……新しい教会堂では、光はもはやそっと忍び入るのではなくたぐいなく美しい、色彩豊かなステンド・グラスをとおして洪水のように流れこんだ。……だがもし聖フランシスやウィクリフののぞんだように、貧しい献身的な福音伝道者であったならば、あれほど崇高壮麗な大聖堂や大会堂がたてられ、何世紀ものあいだ沈黙のうちに神をたたえ、また代々これを仰ぎ見る人々に、至純至高の礼拝のよろこびを与えることも決してなかったであろう」(トレヴェリアン、前掲書、45-46ページ)。

大聖堂が中世の人びとの目にどのように映ったか、またその日常生活に果たした役割を明快に掴むことが出来る。

ところで中世において全体の生産物の重要な部分は (1)教会と宗教による消費、(2)政治による消費、(3)街示的消費に流れた(F. C. Lane, "Consumption and Economic Change", *Journal of Economic History*, Vol. XV [1955], p. 107)。いわゆる公共消費は単純であるが至る所にある村の教会建築とより大規模な大教堂、修道院、大聖堂のような礼拝堂の建設にあらわれたのである。投資の項目よりもむしろ消費の項目の下で宗教的建造物を取り扱うことはある程度恣意的な分類であるが、確かなことは大聖堂や修道院の建造やそこでの礼拝は教会当局者や参拝者の消費を構成していた点であった。にもかかわらず今まで種々の建築様式の建設費用の比較、建築材料の需要の変化での様式上の変化の効果、工学知識の発達の経済的影響はほとんど調査されてこなかった。(R. Roehl, "Patterns and Structure of Demand 1000-1500", C. M. Cipolla ed., *The Fontana Economic History of Europe*, 1, 1976, pp. 127-128.) その目立って例外的な研究は H. T. ジョンソンのよるもので、彼は1100年から1400年におけるイングランドの大聖堂建設の経済的影響を算定した(H. Johnson, "Cathedral Building and Medieval Economy", *Explorations in Entrepreneurial History*, Vol. 4 [1966-67], pp. 191-210)。彼はこの間に多くの修道院や教区教会に加えて、およそ25から30の大聖堂が建立されたか改造されたとし、その経済的効果を計量的に分析し、「どのような大聖堂もそれが位置されている直接的環境の外で経済生活に影響したことはありそうもないように思われる」

(*Ibid.*, p. 207) と結論した。つまり本質的に地域レベルでは教会建設の効果は相当なものであった (Roehl, *op. cit.*, p. 128)。

ここで再び資本がどこに向けられるかという本節の最初の問題に立ち戻ることになる。というのは資本の向けられる方向が生産的なものの生産に対してか、あるいは非生産的なものの生産にかによって、そこから現れてくる経済社会の状況が著しく異なってくるからである。この問題を経済的剰余の使用から来る相違に求めると、ネフの質を追求する文明とその後起こった量を追求する工業文明の経済的側面が一層明瞭になってくる。

極めて経済的な概念である剰余と経済体制の関連から経済体制を歴史的に展望したのはエドゥアード＝ハイマンであった。彼は経済体制を『『歴史的運動の一特殊形態』』であってそれは、社会諸条件を変化させると同時に、それらの条件が経済体制を生みだし、経済体制自体の作動とその意味を変化させる」(野間俊威「ハイマンにおける経済体制論の方法的立場」『経済学論叢』第16巻第2号, 昭和42年, 8ページ。ハイマンの1963年に刊行された著書, *Soziale Theorie der Wirtschaftssysteme* [経済体制の社会理論 この本は後に野尻武敏他訳『近代の運命』新評論, として1987年に翻訳された] は彼の長年にわたる経済体制研究の集大成とも目すべき労作で、この著作で展開される剰余と経済体制の史的展開の関連に注目するのであるが、本拙稿で繰り広げられるハイマンの経済体制の歴史的発展に関する論述はわが国のハイマン研究の第一人者である野間俊威教授の研究成果に依拠した) と捉えた。そしてハイマンは彼の体制理論における最も基礎的範疇として「統合的社会体制」と「経済体制」とを設定し、これらの体制は近代社会の到来とともに「統合的社会体制」(文化経済) から「経済体制」へ、そして再びより高次の「統合的社会体制」へと進行していくという図式を提供した。(野間俊威「ハイマンにおける体制変動の動態論理」『経済学論叢』第17巻第4・5・6号, 昭和43年, 370ページ。「経済体制」という用語はハイマンの翻訳書では「経済主義体制」と訳されている [ハイマン, 前掲書, 449ページ]。)

ハイマンによると、「統合的社会体制」とは「経済体制」と対立する概念で、経済活動を直接的に社会諸目的のもとに統合し、これを統御する編成を「統合的社会体制」(integrated social system) とよび、この社会体制のもとでの経済活動を彼は「文化経済」と名付ける。(野間俊威『経済体制論序説』上巻, 有斐閣京都支店, 昭和41年, 24-25ページ。) 他方、「経済体制」は (1)近代社会の地理的・歴史的枠組のなかにおいてのみ存在し, (2)経済活動が「社会」の統御から解放されて, (3)経済活動が自らの「原理」によって, 自らの秩序と制度とを築きあげた構造として定義される。(同書, 24ページ。)

このように「経済体制」は近代社会の特有の産物と理解してもよく、ハイマンは「統合的社会体制」からこの「経済体制」に到達させる推進原理にすぐれて経済学的な範疇—

「剰余」の使用形態に求めた（同書、27ページ。野間俊威「ハイマンにおける体制変動の動態論理」370ページ）。つまり「統合的社会体制」は剰余の大部分を非経済的目的に使用する体制である。非経済的目的の内容は、西カナダ・インディアンの破壊遊技からエジプトのピラミッドやルネッサンス時代の「芸術文明」の開花に至るまで、種々な形態をとるが、剰余の多くが非経済的目的のために流出したことにより、経済活動が拡張を妨げられる点では共通していることである。（同書、26-27ページ）これに対して「経済体制」においては、剰余の大部分が非経済的使用から留保されて、ふたたび生産に投下され、経済を拡張させるために充てられる。従って、「経済体制」は「生産の拡張のために剰余を排他的に充用する体制」なのである。（同書、27ページ。）

こうしてハイマンは経済体制の歴史的発展を経済的剰余の使用という観点から、「統合的社会体制」→「経済体制」→より高度な「統合的社会体制」という動的な図式でもって構成した。「統合的社会体制」では経済的剰余が非経済的な目的に充てられ、ネフが質を追求する文明における生産の目標と類似する。その典型的な歴史的事例が本拙稿で信仰と美術が結合したゴシック建築の大聖堂でもって説明され、これはハイマンの言う「文化経済」の実現であった。ハイマンは大聖堂について「剰余が大聖堂の建立に投ぜられた町々に、文字通り自発的な剰余労働の産物として、ドームが生れ、……大聖堂は神を賛美し人間をたたえるもの」（ハイマン、前掲書、59ページ）となったと記していた。そこでの労働雇用と資本投資の背後にある主要な力は芸術的完全さへの喜びであって（Nef, *Cultural Foundations of Industrial Civilization*, p. 39）、質、つまり美の追求こそが生産活動の目標になっていた。次に経済的剰余が生産の拡張のために使用される「経済体制」の時代が到来し、これは工業文明の誕生・形成期と一致し、ネフはいみじくも近代のすべての国民とすべての社会階級とはこの工業文明、つまり量的なものの追求にたいしてははっきり示されるこの新しい関心を、ある程度は共通に持ち合わせていると指摘した（Nef, *Civilisation Industrielle.*, p. 31. ネフ『工業文明』33ページ）。丁度ネフが『工業文明の誕生と現代世界』をものしたころ、すでに冷戦構造が形成されていく過程で、世界は二つの対立するイデオロギーに支配され、資本主義体制と社会主義体制に二分されていた。しかし物質的な豊かさをもたらす工業文明は異なる二つの体制ともに志向するもので、この点からすれば、資本主義体制と社会主義体制とは「漸次的産業社会という同一の属の二つの種、もしくは、同一の社会タイプの二つの様式」（R. アロン、長塚隆二訳『変貌する産業社会』荒地出版社、昭和45年、46-47ページ）であったと考えられ、そこに工業文明の経済史的意義が認められるのである。

さらに彼は人類の工業文明への関心が人間の幸福や人間性に加える諸制約をも共有して

いる事実へも配視を怠らなかつた（Nef, *Civilisation Industrielle*, p. 31. ネフ『工業文明』33ページ）。16世紀に石炭の採用と共に工業文明の道を歩み出したイギリスが質的進歩に再び着手するのは1660年から1785年頃までも100年あまりであった。いったん進行し始めれば、工業文明の発達は、量的進歩とほとんど同じくらい質的進歩に依存するのである。（*Ibid.*, p. 218. 同書, 246ページ。）これはこの間にイギリスでこれまで西洋の美術界の第一線で活躍する画家はほとんど皆無の状態であったのだが、同時代のフランスのワトーやフラゴナールの作品と比べることのできるホウガースやゲインズバラやレイノルズのようなイギリス画家の作品が生まれ、イギリス絵画は自立した事実（*Ibid.*, p. 218. ネフ『工業文明』246ページ。「イギリス美術はイタリアのように絵画の伝統がなく、17世紀には……建築をのぞいてそうみるべきものはなかつた。だが17世紀末以降、イギリス独自の絵画が着実に育ち、……その端緒を開いたのがウィリアム・ホガースである」[大高保二郎「18世紀のイタリアとイギリスの美術」千足伸行監修『新西洋美術史』西村書店, 1999年, 265ページ]）からも了解できる。

ところで、ハイマンの経済社会史観の背後には社会生活における人間の基本的に価値に関する二つの命題が仮設され、その第一は、人間は本来「よき生活（Good Life）」を営もうとする欲求をもつという命題であり、いま一つは人間はまた同時に「生存必要（Vital needs）」の充足欲求をもつという命題である。前近代の「統合的社会体制」と近代の「経済体制」は、社会的均整と「よき生活」を志向した文化経済の実現か、あるいは「生存必要」の充足をめざした生産の拡大かのようにそれぞれこの二つの価値の一方の犠牲において他の目標の達成をめざしたことはつとに指摘したとおりであるが、次に来る高次の「統合的社会体制」こそ、「生存必要」の充足達成の基礎の上になつて、「よき生活」の回復を志向しうる体制なのである（野間俊威「ハイマンにおける体制変動の動態論理」371, 375-376ページ）。16世紀の工業文明の誕生に際しても、イギリスで断絶された質、すなわち美への追求が結局、その放棄に繋がらなかつたことはすでに本節で示したとおりである。それゆえ、現代の成熟した工業文明を創始するのにもその不可欠な基礎を提供する質的進歩の重要性（Nef, *Civilisation Industrielle*, pp. 218, 248-249. ネフ『工業文明』247, 280ページ）を、つまりハイマンの体制理論からすれば、文化経済の実現の重要性を、ネフは工業文明の過去の展開を顧みて強調するのである。

## お わ り に

16世紀に顕著になり始めた木材燃料枯渇に伴う木材価格の高騰の結果、イギリスは燃料

として必然的に当時不健康と思われていた石炭燃料の採用に踏み切った。この熱エネルギーの本格的な使用は16世紀後半から17世紀前半にわたるイギリスの経済状態を、具体的に記せば、鉱山内から地下水を排除し、深い堅坑から地上へ石炭や鉱石の巻き揚げのために、沼地の排水、水路および陸路での嵩張った製品をより安く運搬すべき港の浚渫のために、製造業において希少になっていく木材燃料から豊かに存在し安価である石炭への代替を可能にさせる大規模で一層効率のよい炉を発明するために差し迫った必要を作りだし、この状態に対してイギリスの進取の技術家や投資家は生産量を増やし労働量の削減を意図した機械や他の実用的な装置の発明や発達を押し進めた。これらの刺激がすべてイギリス人の才能を質や芸術的壮大さよりも量と実用性に向かわせたのである (Nef, "Art", pp. 304-305)。

この当時のイギリス社会が直面した問題を16世紀における石炭の採用が差し出した先鋭化した技術問題とネフ言う。それらは ①かなりの深い炭坑から石炭を掘ること→坑内排水問題, ②石炭の輸送問題→石炭の内陸輸送, ③石炭の工業的利用→製鉄の過程での石炭燃料使用の3つの技術問題で、これらの技術問題がいずれも18世紀から19世紀にかけて ①鉱山排水のための蒸気機関、のちに工場動力として利用, ②運河の開設および鉄道の建設, ③ダービーの石炭のコークス化やコートの攪拌式精錬法で解消されるのである (ネフ, 原光男訳「石炭の採掘と利用」シンガー他編『技術の歴史』5巻, 筑摩書房, 昭和53年, 66, 66-68ページ。Nef, *The Rise of the British Coal Industry*, Vol. I, pp. 251-252, 254)。このような16世紀から17世紀末までのイギリスの技術発展をハリスは石炭の採用を中心に推進されてきたことに注目し、「石炭燃料技術の発展」と要約した。(Harris, *Industry and Technology in the Eighteenth Century: Britain and France*, 1972, pp. 8-9.) さらに付言すると、ネフは18世紀のイギリス産業革命を「これらの重要な3問題が1780年代にイギリスで始まった産業革命を引き起こした」(Nef, *Cultural Foundations of Industrial Civilization*, pp. 58-59)と把握し、16世紀に起きた初期産業革命と18世紀の産業革命の連続性を強調した(ネフの産業革命論については拙著, 247-251ページを参照)。

イギリスで起こった動力機械、大規模な溶鉱炉、生産の規定通りの方法のような技術改革を伴った経済発展は絵画や造形美術の美的な問題とはほとんど、あるいは全然関係のない問題に手先の器用さと知識を導き、真の美術を促進するよりもむしろそれを妨げる方に動いたのである。(Nef, "Art", p. 304-305.)

逆に、フランスはこの種の工業発展から多分に逃れていた。それは一部にはこの国が深い鉱脈がほとんどなかったためであり、大抵の地域に豊かに森林があったためであり、こ

の時期にイギリスで起こったような人口成長がなかったためであり、土地や森林もいれた他の自然資源への大きな圧力がなかったためであり、イギリスのように修道院解散や聖職者の数の削減によって生じた教会から世俗へ財産の移転がなかったためであった。中世に培われた手先による熟練した芸術的な仕事から来る古い伝統は宗教改革以前にイギリスにおいてよりもフランスで一層強固に確立されてきた。続く1世紀もフランスはこのような伝統の維持と宮廷を取り込んだ美術の再生にイギリスよりずっと熱心であった。1540年から1640年の間、2国の経済発展にくっきりと現れた対比がフランスの絵画と造形美術における優越を強化した。フランスがイギリスをつねに遅らせた贅沢品や芸術品の製造業で主導権を増大させたのはある程度初期産業革命を経験しなかったためであった。こうして初期産業革命は近代をとおして絵画と造形美術におけるイギリスの地位の劣性を招いたことになる。(Nef, "Art", p. 305-306.)

このように、1540年から17世紀中葉までイギリスで絵画を中心とする美術がフランスに比較して、立ち後れていた理由の一つにこの国が工業文明を誕生させ、質、つまり美を追求する伝統的な文明と一時的に断絶したことを挙げても誤りではないであろう。

最後に本拙稿の“はしがき”で引用したネフの晩年の労作の最終部分の箇所に立ち戻る。彼は工業文明の将来を展望して、16世紀の石炭の採用で端を発した18世紀のイギリス産業革命から現代に至るまでの量的進歩のおかげで、質的進歩のために自由に使用できる物質資源は初期産業革命の時期に比較してはるかに豊富であることを認める。ないものと言え、それは質的進歩のために物的資源を用いる慣行なのである。(Nef, *Civilisation Industrielle*, p. 246. ネフ『工業文明』277ページ。)それととも、初期産業革命のあと18世紀前半に至るまでイギリスでは質的進歩が次第に地歩を占めてきた(拙稿、「18世紀のイギリスとフランスの経済発展」108-109ページ)事実をわれわれは共有している。

だからこのような貴重は歴史的経験に照らすと、丁度ハイマンが経済体制の史的展開において、最終的に「生存必要」の充足達成の基礎の上に「よき生活」の回復を志向した高次の「統合的社会体制」を構想していたごとく、ネフは今日の工業化した世界において地球の不確かな燃料資源の有効な開発への最良の期待は質的進歩、換言すれば美の追求をとり戻すことであると主張するのである(Nef, "An Early Energy Crisis and Its Consequences", p. 151)。(2009. 5.12.)